『幸吉の旅』

この物語の原名は Timothy's Quest といつて米國の女流作家 Kate Douglas Wiggin 女史の作で一八九〇年出版である。女史は子供の性格の描寫が巧みなので名高いが、この話も貧民窟の二幼兒が——男の子と女の子とが——田舍へ逃げ出して「母チャン」になつてくれる人を探して歩く。そしてしまひに心のひがんだ獨身(ひとり)ものゝ女を優しい人にならせるといふ筋である。

全部をすつくり譯出するのは長すぎるし煩はしくもあるので、適宜に所々を省いた點は御了承願ひたい。

東京女子高等師範學校教授　岡田みつ

一

湊小路(みなとこうぢ)といふ細民窟の町角から二軒目の荒屋(あばらや)。

そこの三番目の室(へや)に白い物が、じつと横たはつて居て、女が二人番をして居た。それはお房といふ女の死骸なのだつた。

お房は子供を——一切問答抜きで——貰つて育てるのが商賣だつた。四十五年の間友達つていふものも無く、てんで他に親切もしなかつたから、死んだ今となつて花一つ手向けてやる者もなく、「優しい人だつたよ」と言つて涙一滴落としてやる者も無かつた。

通夜をしてゐる女二人も、お房の遺骸を「大事な佛」などゝ思つて居る風はなかつた。お酒をたつぷり振舞つて貰つたので、二人とも上機嫌だつた。それに、もう午前の四時に近いので、嫌な通夜の勤も直に濟むし、十時には死骸が取片付けられる手筈になつてゐたから。

お安婆さんは椅子にぐつと身體をはめて、

「お房さんは身につけてる著物のほかに何もないンだから財産爭ひなんてことがないネ」と言つて自分の洒落に悦に入つてゐた。

「さうさ。と相手のお市が引取つて、

「世帶道具から——ろくなんぢやないけれど——お葬ひの入費位出るだらう。もし借りでも殘つて居るンなら、貸した人は何て言つたつて取れつこなしだ。」

「氣になるのは子供だけだネ。」とお安が言ふ。

「お前さんも苦勞性だね。——あんな子供の事を心配するなンて。自分の子ぢやなし、それどころか、誰の子だか知れもしない、誰も何とも思つてもしないものを。朝飯でも濟んだら、どこかの養育院に遣つちまやア、それでお仕舞ひだよ。昨日お前さんがお房さんに話した時、あの人何て言つたへ？」

「子供をどうしたいンだつて私が訊いたのさ。さうしたらどうでも宜いようにしておくれ、あんな畜生ら。私やどうだつて構はないッて言つてネくるりと寢返りをして、それッきり死んぢやつたンだよ。それが遺言さ。だけど、あの人どう

もすつかり正氣ぢやなかつたンだよ。この五六日變だつたもの。」

「なに、自分が内密にしてゐる事を他に言はないもの、そこンとこは氣が確かだつたンだ」とお市は言つた。あの子達は一體どこから來たンだか、誰一人知つてるものはないンだよ——もつとも今ぢやあいつらに金が付いてゐないから誰も氣にも留めないが。」

「うん、その事ならネ、お房さんがまだ身上がよくツて山の手に方に居た時分に、あの男の兒の世話料だつて、毎月金が來てゐたつけ。どこから來たもンたか知らないが、何でも遠くからのやうだつたよ。それからといふもの、あの人お酒を飲むようになつてネ、だん〳〵零落れてとう〳〵半年前に此處へやつて來たンさ。あの男の兒の實家の人だか、金をよこしてた人だか、とにかく先方の人は、お房さんがあんな身持なのを知らないらしい。どんな樣子だか見にも來ないから、先方もたいして案じてもしないンだらうがネ。あの子はお房さんが引取る前は孤兒院に居たンさ。それを私が探り出したのだよ。何しろ三月程前から金が來なくなつたンで、お房さんは、二度手紙を出したンだが何の音沙汰も無かつたの。それで、もう七日か十五日も待つて見て、金が來なかつたら、子供を追ン出しちまふと言つてゐたツけ。一體から長く手許に置く氣はなかつたンだらうけれど、あの子が赤ン坊の世話をよくするもンだから。」

「ぢや、あの赤ン坊はどこの子なの。」

「お前さんも聞きたがりやだネ。」とお安はまた一杯飲み干して「お前さんもどう？　一杯お上りな澤山あるンだからさ。お房さんはネ、始ツから男の兒の方は嫌ひで、追ン出したくツて仕方がなかつたンだけれど、さうも行かないでネ。

あれや、變な、ませた子で、あんまり怜悧いから邪魔ッけな位なんさ。ところがネ、あの子と赤ン坊とが——名は菊豐ッていふンだが、みんな菊嬢、菊嬢ッて呼んでるの、そら、あのよく此處いらへ來る女優の眞似して附けた名だもの——その二人が仲がよくッて、どうしたつて離れないンだ。お房さんは菊嬢の方を少しは可愛いがつてゐたよ——あの人にも可愛がるッてことがあるとすればネ。あの人は子供を苛めたりしないンだよ。苛めるのも面倒くさかつたンだらう。それでネ——エ、何話して居たつけ。さう〳〵、その赤ン坊は誰の子だか、誰が金を出してゐたンだか知らないが、あの子はいまにたいした「おきやん」になる事請け合ひだ。あの高慢ちきな態度を見るとどこのお姫樣かと思ふよ。も、ちつと年がいつてゐると、あの子を私や貰ひたいと思ふけれど私も此地に、もう居ないンだから。」

「ぢや、二人を引離したら、いやがつて大變だらうネ。」とお市が訊いた。

「さうだらうよ。だけど、騒くだけ騒がせて、それでお仕舞ひにするのさ。」とお安は暢氣らしく言つて「お前さんが幸吉の方を先へ孤兒院に連れて去つて戻つて來たら、私が赤ン坊を育兒會の舍へ連れて行くとしよう。泣いたり、わめいたりするなら、さうさせておけばいゝ。このお安さんにかなふもンか。」

「そんな大きな聲出すのお止しよ。もし幸吉に聞こえると怒つちやつて、こちとら眠られやしない。愈々といふ時まであの子に知らせちやいけない。さもないと、それア面倒になるよ。」

「あいつら、よく眠つてゐるよ。」と答へながら、お安は半分明いてゐる入口を不安さうに見やつて、「先刻入つていつて、幸吉の頭の下から枕を

引ぱり取つたけれど、動きもしなかつたもの。まるで丸太ン棒みたいになつて眠つて居たつけ。菊嬢もさ。もう默つてゐいで。私やちよツびり眠るから。お前さんはその長椅子に横にゐなり。私は椅子を二つつないだその上でいゝ。もし八時に目を醒さなかつたら、起こしておくンなさいよ。私や、やきもきしたり考へたりして、すつかり草臥れちやつたから、このまゝ一生眠り通せさうだ。」

二

死人の置いてある静な室に、二人の見張りの女の鼾が聞こえ出すと、隣りの室の寝床から小さな人影が抜け出した。そして入口の戸を、音のしないように、慄へる手で閉めて、窓の方へ忍びよつて行つた。戸外は汚ない街でその上の灰色の空はほんのり明るくなつてゐた。

そのちいさな影は江崎幸吉だつた。がつひ數時間前に菊嬢を寝かしつけてから、自分の固い寝床に入つたあの幸吉とは別の人間のやうなにつて居た。どきつく胸に手を押し當てゝ、窓のところに慄へて立つてゐる、この子の眼には俄かに覺悟の色が浮び、その大人めいた顔には心配の氣色が新に漂つてゐた。

「菊らやんをイクジ何とやらいふ處へなんかやらないやあたいだつて、菊ちやんと別れて、菊ちやんを見られないやうな養育院へ行くもンか。」と半分口の内で反抗的に呟いて、幸吉は、その眼を何も知らずに眠つてゐる菊嬢から、入口の方へと移した。そこの戸は何時なんどき開いて、この大事な大好きな天にも地にも換へられない菊ちやんと自分とを引離すかも知れないのだつたから。

どうしようかしら。逃げるンだ！　それより他に途はない。たいしてむづかしい事でもないから。

酷い小母さん達はよく眠つてゐるし、お房ッていふあの怖い人はもう物を言ふ氣遣ひはないし、湊小路の人でさういつまでも追かけて來る者もなさそうだから。

「だから」と幸吉は敏捷く考へた。支度をして、きいちやんを連れて、裏口からソウッと拔け出して、ほんとうの田舍へ行かう。田舍へ行けばこんないけない人が探しに來ないし、きいちやんの「母ちやん」になつてくれる人が居るだらう。あたいが大きくなつて、きいちやんを引取るようになるまで、可愛がつてくれる人が…」かう考へついたらすぐと、幸吉はそれを實行し出した。

お房が最負の女優に因んで名をつけた菊豐の菊嬢は昨夜は着物を著たなり床に入れられたのだつた。この子のにとなつてゐる乘物は四つ車輪のついてゐる、そして汚い肩掛の敷いてある洗濯物入であつた。三尺ばかりの干物綱をその籠に括りつけて、この粗末な乘物に菊姫さまをおのせ申して鬼の仕所から救ひ出すといふ寸法なのだつた。幸吉の王子樣がお姫樣を御起こし申したところで、お姫樣はまだお年が行かなくて、御徒歩は出來ないのだつた。であるから、この洗濯物入で御馬車になつて幸吉がその御者になるより仕方がなかつた。

幸吉は、ぼろ寢着を、見すぼらしい平常着に著更へてから、ガタクリ簞笥からたつた一つしかない清潔な前垂と、「きいちやんが汚らしい姿だと」母チヤン」が見付からないかもしれないと幸吉は心でさう考へて)、他所ゆきの帽子とを取出し、それから最後に櫛を一つと、隅つこにあつた色の褪せた繪日傘を持出して、それをお馬車の席に敷いてある古肩掛の下へ押込んだ。それから、彼は薄暗の中を手探りで棚のとこへ行つて、貯金箱を下ろ

した。その貯金箱はけば〳〵しい塗り立てた家の恰好をしてゐて、その戸口に貯蓄銀行と彫り付けてあるのだつた。幸吉は、ガラ〳〵と振つて見る勇氣はなかつたが、お房が近頃身體がわるかつたから、酒代をこゝから持出しはしなかつたらうと思つただけだつた。

さアこんだは、兵糧だ。臺所にはお葬式用の菓子が出來てゐた。その中から、幸吉は急いで十あまり煎餅を取つて、タオルに包んで、その他の食べものと一緒にお馬身の中に隱した。

先づこゝまでは之で宜しと。これからが愈々大事なところなのだ。胸を早鐘のやうにドキドキさせ、怖ろしさに眼を大きくして幸吉は、隣室との境の戸のところへ進んでいつて、ソウッと明けてみた。高低二種の音が、盛に鼾の音がしてゐるのでやれよかつたと思つた。それから、裏の路地を見下ろすと、人ッ一人、いや鼠一疋だつて通つてゐなかつた。これなら宜いと思つて、幸吉は室に戻つて、壞れかゝつた洗濯物入をその細腕で持上げて、路地から街路のすこし先の方まで運び出し、空地の傍の歩道へ下ろした。かうして置いて、彼は、家へ取つて返した。室の入口に立つて、

「都合よく鼾をかいてゐるなア。あたい置手紙をして行かうか……その方がいゝかも知れない……さうすれば追ひ掛けて來て、連れ戻したりしないかもしれない」

と考へた末、紙袋の裂いたのに一言書いてピンで戸に留めておいた。その文句は、

「よそのいゝ小母さんとこへもらはれて行くンです。とほいとこだから、さがさないで下さい、さよなら、幸吉。」

といふのだつた。

これですつかり支度は出來たのだつたが、もう一つ用が殘つてゐた。それは一ヶ月程前に奇麗な

子供好きらしいどこかの娘さんが幸吉を日曜學校へ連れて行つてくれて、始終、御祈りをするようにと教へたのであつた。幸吉は、今それを思ひ出して、破れ帽子を柱に引ッかけておいて、菊嬢の床の傍に跪いて、小聲でお祈りをした。

「天にまします神様、どうぞ、きいちやんに「母ちやん」を見付けて下さい。菊ちやんが懐くようないゝ母ちやんを。して餘分のがあつたらあたいにも。もし無ければあたいのはいりません。洗濯入をあたいのでもないのに取つて行きますけれど御免なさい。あれがないとね、神様、あたい菊ちやんを汽車ンとこまで連れてかれませんもの。それから、日傘も持つて行かないと菊ちやんが日に焦けて、貰つて呉れ者がないでせう。今日は之でお仕舞ひ、いそぎますから、アーメン。」

幸吉は帽子を被つて、身體を屈めて、眠つてゐる菊ちやんを抱き上げた——そのいつもかはらず忠實な腕に。菊ちやんは眼を明いたが、大好きな兄ちやんに抱かれてゐるのに安心して、丸ッこい腕で、幸吉の首にしがみ付き、長い呼吸を一つして再夢の國へ遊びにいつてしまつた、赤ン坊の重みに弱りながら、幸吉はその室を出た——あとを閉めるのさへ怖いので戸をそのまゝにして。

路地を出て、角を曲つて幸吉は慄へる足で、ひた走りに走つた。もう向ふにお馬車が見えるところまで來た時に、後方に、走つてくる足音が聞こえた。神經の立つてゐる幸吉の耳には、敵を追かけて復讐しに來た大車の足音のやうに響いた。が怖くて振返つて見る事が出來ない。早く、早く!! 洗濯物入れのとこへ、そして自由の地へ、日傘もいらない、お煎餅も、櫛も、前垂れも——何もいらない。それを貰つて敵が退却してくれるなら。たゞ自分の抱へてゐる捕虜だけは渡すまい。

後方、足音は次第次第に早くなつて來た。幸吉は、菊嬢を洗濯籠に入れ、切羽詰つて、振り返つて追手を見た。すると、ちいさな、汚らしい、粗毛の、垂耳のまるで襤褸が動いてゐるやうな者が幸吉の膝に跳びついた。そして嬉しそうにクンクン鳴いて、畜生心に思ひつくかぎりの嬌態をして是非驅落の仲間へと懇願するのだつた。

ポチが尾行て來たのだつた！

幸吉はポチで宜かつたと思つた嬉しさに、一寸立ち停つてこの犬を抱き締めてやつた。ポチの方でも、これから先の御飯もろくに食べられさうもない旅を、物狂ほしい程に悦び樂しむのであつた。さて、幸吉は、綱を取り上げて御馬車を徐々と停車場めがけて通りを曳いていつた。

何もかも都合よく運んだ。朝の乳配りに出かける牛乳屋と（もう四時すぎて居たから）ふら〳〵した歩調で今時分やつと自宅へ歸る醉拂ひとに出遇つただけだつた。そんな男は他に頓着するどころでないから、この小さな一行は、何も咎められずに濟んだ。

斯うして、幸吉と、菊嬢と、ポチとは、一組になつて、世の中への旅に出たのだつた。（つゞく）